建設ぶらり旅

大日影（おおひかげ）トンネル遊歩道と桃の花、あるいはほうとう その2

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

勝沼ぶどう郷駅前の桜並木に沿って数分歩くと、現役のトンネルと寄り添うように大日影トンネル遊歩道の入口があった。

このトンネルは明治三十六（一九〇三）年に、中央本線の鉄道トンネルとして開通した。それまで馬力で運んでいたワインやブドウを迅速に、しかも大量に出荷できるようになったため、地域の経済は革命的な変化を遂げたという。その後、大正二（一九一三）年には、地元の請願によって現在の勝沼ぶどう郷駅が開業。さらに輸送量の増加にともない、昭和六（一九三一）年に電化、昭和四十三（一九六八）年には複線となり、大日影トンネルは下り専用となった。しかし、トンネルの一部に変状が生じていたため、平成九（一九九七）年の新大日影第二トンネルの完成にともない廃止となった。

大日影トンネル遊歩道の坑内は、点々と照明が設置されているので、薄暗いが歩くには差し支えない。トンネルの両側に歩行者用の舗装路があり、真ん中には写真で見たとおりレールが続いている。なるべく使用当時そのままを残したらしく、鉄道標識や待避所などの設備のみならず、蒸気機関車が吐いた煤まで坑壁にこびりついているのだから、鉄道マニアにはたまらないだろう。それに、真っ直ぐなトンネルなので、はるか先に出口が見えるのも面白い。

そういえば、神奈川県の厚木市七沢の山中には、心霊スポットとして名高い山の神トンネルがある。これも同じように出口が見えるが、坑内は真っ暗なので光の穴が開いているように見える。それを見つめながら歩いていると上下左右の感覚が麻痺してくるし、坑内は風声が響いて他の音が聞きづらいので、後ろから何者かが迫ってくる気がしてならない。その点、大日影トンネル遊歩道は不気味さが全くない。わずかな照明が魔を寄せつけないためか、それとも英国式レンガ積みの内壁が、人のぬくもりを残しているからか。なぜか風の音もしない。

約二五分のトンネルの旅を終えて陽光の下にでると、小さな渓谷をはさんだ正面に旧深沢トンネルがある。こちらも中央本線の鉄道トンネルだったが、やはり平成九年に廃止され、現在は「勝沼トンネルワインカーヴ」となっている。全長約一・一キロメートルの手前二〇〇メートルが個人用、奥の九〇〇メートルがワイナリー各社のワイン貯蔵庫として提供され、見学も可能だという。

さて、昼も近いし、このままワイナリーへ直行といきたいが、その前に勝沼堰堤を見物することにした。ウォーキングコースのサインにしたがって歩けば、ゆっくりでも大日影トンネルの深沢口から二〇分ほどでつく。大正六年に完成した砂防堰堤で一部基礎にコンクリートが使用された、コンクリート砂防堰堤の実験的構造物だという。堰堤幅三八・五メートル、堤高一九・四メートル。一見すると自然の滝のように美しい。

よし取材はこれまで。いよいよワインだ。甲州街道から三四号線を西へ、目的のワイナリーカフェへと向かう。しかし、一向に桃の花は見つからない。桃源郷は幻か。

勝沼堰堤

［交通］大日影トンネル遊歩道深沢口から徒歩約20分